

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	藤原広嗣論 : 文苑
Author(s)	笠間, 益三
Citation	龍南會雜誌, 22 : 42 - 43
Issue date	1893-12-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4342
Right	

天下絕境使人應接不暇。停嶋十余日。或漁或製。或交漁夫群。詳其慣性之所在。或訪村吏。調其漁事之如何。拮据了第二回調查。吾輩之發鳥羽大塚。先生代監之始終指揮從事。至八月三十一日。事全結局。乃聚村民。饗應訣別。有詩曰。螺杯美酒漲紅潮。盆裏鯛鱈潑刺跳。獻酬捧君君勿惜。何時復有此良霄。翌朝至鳥羽會乙組。此日步謁伊勢兩大神宮。已夜歸宿時。風雨頻至。便船不發。港爲之滯在。二日至九月三日。海運丸解纜。吾等忽々訣大塚先生。御木本幸吉君及新井雄馬君上舟。有詩曰。一天秋色暗清灣。無數嶋巒指顧間。不忍歸舟離港埠。泣向知已鳥羽山船執前回路。一晝夜歸着江都實九月六日也。

文苑

齋田生携孔子遭厄圖來索贊。即援筆題二十四字。

內田 遠湖

造次顛沛。所執唯仁。一時身屈。萬世道伸。不懼不惑。吁嗟聖人。

藤原廣嗣論

教授

笠間 益三

雖其志出於愛君。憂國而無他意。其蹤跡苟有可議。則人將論其跡。而不問其心。何則。心不可見。而跡可徵也。自古世多有之。而如藤原廣嗣事。豈亦不然乎哉。當廣嗣之時。庸君在上。乾綱頹弛。大臣姑息。百度無張。至使姦僧若玄昉者。蔑如王尊。出入宮禁。而自恣姦穢。如吉備眞備。頗負時望。身列大臣。而不言。是何等朝廷乎。廣嗣憂之久矣。故其在京也。上書請斥。

玄昉不聽。其及赴任上表。指斥時政。論玄昉及眞備之姦。朝議以爲謀叛。發兵伐之。廣嗣輒舉兵于西陲。其意固在除姦穢而清君側爾。決非有叛意也。但其矯官符。急遽舉兵。其跡固有可議者。是其所以取叛名也。廣嗣在陬僻千里之外。內無大臣爲之因緣。外無強援爲之聲勢。孤立獨行。欲以成其志難矣。故官軍一至。廣嗣不暇自救。當此時。雖欲曰吾非敢謀叛也。欲除君側之姦耳。無可以爲証據者。故佐伯常人。舉其矯官符之一事。詰之。輒足以箝廣嗣。清君側之口。彼有按我之跡之權。我無明我之心之道。不能不屈服而退走。遂身負叛名而死。萬古無雪其冤者。可悲矣。是由其跡有可議者而然也。惜矣哉。故有憂國之心者。欲立功顯名。則宜深謀遠慮。無跡可議。而後動也。不然。則適爲姦臣所籍口。身斃于汗名之下。而無補於國家。吾非獨爲廣嗣惜也。

弓 字

東園のあるじ

ある人來り問ひて曰はく、弓を射ることは衛生に可なるは論を俟たされど、他に妙味はなきにや、答へて曰はく、學生の詞とも覺えぬものか、いかに弓の字をよむや、うの人うち傾きて時經をも辨解し得ず、たのれはこの日それのあてある人々と梅見を約せり、空しく過すべき時あらねば、更一口を開きて曰はく、本を務めざれば弓の一字すら説き得ず、今の諸學科の多きを苦しむも、本をあきらかにせざればあり、いかにとをまば第一にまれ第二におれ外國語にたゞくしきは、漢文に精まからざればあり、うれに精まからざるは、けだし國語に疎まきはあり、見よ學びて時よ之を習ふとは、是古の博士が國語もてよく、をの助辭を施し、あり、されど顔回ある者ありの、あるは、後人の誤りしにて